亀井孝他編『言語学大辞典』(世界言語編)「セレクション。ヨーロッパの言語」(三省堂, 1998年)

〈表 1〉 ロマーニー語の名詞の格変化

	単数				複数		
主格	o	bər-o	rakl-o	'the big boy'	i	bər-e	rakl-e
対格	i	bər-e	rakl-es		i	bər-e	rakl-en
属格	i	bər-e	rakl-es-k(er)o		i	bər-e	rakl-eŋ-(er)o
与格	i	bər-e	rakl-es-ki		i	bər-e	rakl-eŋ-i
奪格	i	bər-e	rakl-es-te		i	bər-e	rakl-en-de
具格	i	bər-e	rakl-es-sa		i	bər-e	rakl-en-sa
前置格	i	bər-e	rakl-es-ti		i	bər-e	rakl-en-di
呼称格		bər-e	rakl-aya			bər-e	rakl-ɔle

š の2種をもっている．また，Skr. putra-「息子」に対するパーリ語 putta- のように，p, t の破裂音と r が連続する場合に広く同化がみられるが，ロマーニー語は，potra のように同化を示さない．これも北西方言に共通する現象である．また，Skr. pañca「5」に対する R. panj のような，鼻音に続く子音の有声化の現象は，アショーカ王碑文の資料にはまだ認められない北西方言の新しい変化で，ロマーニー語がこれを示すことは注目に値する．

このように，いくつかの変化の傾向は中部方言に類似してはいるものの，保守的な面と，新しい変化については，北西方言に共通した特徴をもつところから，ロマーニー語は，中部の出身でありながら，後に北西部に移住した人々の言語であろう，とターナーは推定している．

［言語特徴］　ロマーニー語がインド語派に属することは，すでに，18世紀に指摘されていたが，19世紀に入って，ポット(A. F. Pott)，ついでミクローシチ(F. Miklosich)によって，その資料が集大成され，本格的な研究の基礎が築かれた．その言語は，形態論的にみると，総合型から分析型へ移行していく過程を示している．たとえば，名詞の格変化をみても，ロムニモスでは，主，対(または斜)，属，与，奪，具，前置，呼称の8格をもっているが，属，与，奪，具，前置の5格は，対格を基にして，それに，それぞれの接尾辞をそえて形成されている(表1を参照)．そして，この接尾辞は，男・女性名詞について変わりはない．

動詞についても，現在と完了の2形に人称変化は維持されている(表2を参照)が，未完了と過去完了は，現在，完了の変化形の末尾に，さらに -as をそえて形成される．

クレオール化したアングロロマーニーでは，この分析的傾向が著しく，英語の影響をうけ，それに接近している．たとえば，名詞，代名詞に，性，格の消失の傾向がみられ，代わって，英語の複数，所有の -s が多用される．比較級，最上級の形容詞の語尾も，英語に等しい．動詞は，ロマーニー語の3人称単数形が代表として選ばれ，he, we などの英語の代名詞とともに，人称変化を形成する．また，to be の動詞には，ロマーニー語本来の形と並んで，英語の形がそのまま用いられている．

〈表 2〉 ロマーニー語の動詞の人称変化

(例：'I see')

	現在	完了
単 1 (me)	dikh-av (dikha, dikhava)	dikh-om
2 (tu)	dikh-es(a)	dikh-an
3 (yov)	dikh-el(a)	dikh-as
複 1 (ame)	dikh-as(a)	dikh-am
2 (tume)	dikh-en(a)	dikh-an
3 (yon)	dikh-en(a)	dikh-e

以下に，ヨーロッパのロマーニー語(R.)とサンスクリット(Skr.)の語彙の対応表をあげておこう．

Skr.	R.	
eka	yekh	「1」
dvau, dve	dui	「2」
trayas, trīṇi	trin	「3」
catvāras, catvāri	štar	「4」
pañca	panj	「5」
ṣaṣ	šov	「6」
akṣi	yakh	「眼」
agni	yag	「火」
karṇa-	kan	「耳」
kar-	ker-	「つくる」
kāla-	kalo	「黒い」
khād-	xa-	「食べる」
gharma-「暑さ」	kham	「太陽」
daśa	deš	「10」
danta-	dand	「歯」
dā-	de-	「あたえる」
duḥkha-	dukh	「苦しみ」
dṛś-	dikh-	「見る」
doṣa-	doš	「過失」
pac-	pek-	「料理する」
pat-	per-	「落ちる」
bubhukṣā	bokh	「飢え」
bhaginī	phen	「姉妹」
bhūmi-	phuv	「大地」
bhrātṛ-	pšal	「兄弟」
māṁsa-	mas	「肉」
mārayati	mar-	「殺す」
rātri-	rat	「夜」
labh-	le-	「取る」
lavaṇa	lon	「塩」
lohita-	lolo	「赤い」
varṣa-	berš	「年」
hemanta-	jvant	「冬」

［参考文献］

Turner, R. L. (1926), "The Position of Romani in Indo-Aryan", *Journal of the Gypsy Lore Society* (3rd Series, Vol. 4)——*Collected Papers* (Oxford University Press, 1975)に再録.

Bloch, J. (1969³), *Les Tsiganes* («Que sais-je?», Presses Universitaires de France, Paris；日本語訳：木内信敬訳『ジプシー』, 白水社, 東京, 1973)

Lockwood, W. B. (1975), *Language of the British Isles Past and Present* (Andre Deutsch, London)

Ventzel, T. V. (1983), *The Gypsy Language* (Nauka, Moscow)

Hancock, I. (1984), "Romani and Angloromani", in P. Trudgill (ed.), *Language in the British Isles* (Cambridge University Press)

［参　照］　『大辞典』インド語派

(風間　喜代三)

ロマニア語　limba română

＝ルーマニア語

ロマンシュ語　英 Romansh, 仏 romanche, 独 Bündner Romanisch

自称には，rumantsch などがある(後述)．

［概　説］　ロマンシュ語は，ロマンス諸語の1グループである，レト・ロマンス(Rhaeto-Romance)諸語に属し，スイス国内で，約5万人弱によって用いられる言語群の総称である．1938年には，ドイツ語，フランス語，イタリア語に続く第4番目の国語として，また，1996年には公用語として認定されている．

レト・ロマンス諸語には，ほかに，イタリア北東端のユーゴスラヴィアとオーストリアに国境を接するフリウリ(Friuli)地方で話されるフリウリ語(furlan; 言語人口，約50万人)と，イタリア北部ないし南チロルの山岳地帯で話されるドロミテ語(自称は ladin; 同，約3万人)とが含まれる．これら3つの言語が互いに共通する言語上の特徴をもつことから，1つのグループにまとめられ，他のロマンス諸語と区別されるが，系統的関係と，下位分類と，名称には，異論がないわけではない．地理的，歴史的にみると，これらレト・ロマンス語の下位区分の3地域には，政治的，文化的な統合の核となりうる中心地は存在していない．

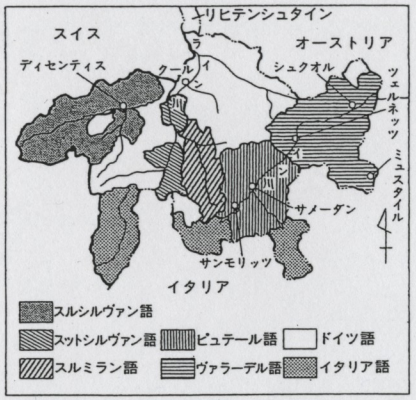
［分布・話者・方言］　スイス国内のレト・ロマンス語であるロマンシュ語は，グラウビュンデン(Graubünden)州のアルプス高原地帯で，ドイツ語，イタリア語とともに，この州の公用語として，州人口約16万人の23パーセント，約3万7千人によって使用されているにすぎない．地図上の面積では，グラウビュンデン州の約半分を占めるが，母語として残されているのは，主に山間部の離村で，逆に，ライン川上流の狭隘な平地は，工業化，商業化が進んでいて，ドイツ語人口の密度が高い．また，故郷のグラウビュンデン州を離れて生活するロマンシュ語人口は，約1万3千人で，年々，漸増の傾向にある．彼らのほとんどが，異言語間結婚をしており，第2世代以降は，言語的，文化的に，ロマンシュ語とはほとんど接触をもたずに育つことになる．

グラウビュンデン州の主都クール(ドイツ語名 Chur；ロマンシュ語名 Cuera, Coira 等)は，中世末にはドイツ語化し，そのために，ロマンシュ語を州の標準語とする契機を失ってしまった．ロマンシュ語使用地域は，徐々に広がるドイツ語圏に分断された上，大きな渓谷ごとに方言差があり，名称もそれぞれ異なる(〈図〉を参照)．

1) スルセルヴァ地方スルシルヴァン語(表ライン川源流地帯)
2) 中央グラウビュンデン地方(裏ライン川流域)
   a) スットセルヴァ地方スットシルヴァン語
   b) スルメイル地方スルミラン語
3) エンガディン渓谷地方ラディン語
   a) ピュテール語(高地エンガディン地方)
   b) ヴァラーデル語(低地エンガディン地方とミュスタイル渓谷)

クールからライン川を10キロメートル遡ると，2つのライン川源流に分かれるが，ロマンシュ語も，ここで，2つの方言地域に下位区分される．西のオーバーアルプ(Oberalp, 2,044 m)峠に源を発する表ライン川渓谷(Vorderrhein)のスルセルヴァ(Surselva)地方スルシルヴァン語(sursilvan)と，南のシュプリューゲン(Splügen, 2,113 m)峠のあたりに源をもつ，裏ライン川渓谷(Hinterrhein)のスットセルヴァ(Sut-

〈図〉 ロマンシュ語の方言分布



selva)地方スットシルヴァン語(sutsilvan)である.

前者では，ロマンシュ語はロモンチュ(romontsch)とよばれている．中世からベネディクト派修道院があって栄えたディセンティス(ドイツ語名 Disentis；ロマンシュ語名はムシュテール Mustér)では，1857年に，初のロマンシュ語新聞『ガゼッタ・ロモンチャ』(*Gasetta Romontscha*)が創刊され，現在にいたるまで，文芸活動のひとつの中心となっている．

後者のスットシルヴァン語では，自称言語名はルマンチュ(rumàntsch)，ルマウンチュ(rumauntsch)で，言語的特徴は，スルシルヴァン語よりも，むしろ，東に隣接する後述のスルミラン語(surmiran)に共通性をもつ．したがって，この方言と隣のスルミラン語とをまとめて，中央グラウビュンデン方言とよぶこともある．この地域は，交通の便がよく，商工業や観光業の発展により，著しくドイツ語化が進んでいる．

スルミラン語では，ロマンシュ語はルマンチュ(rumantsch)と称し，特に音声面で独自の変化をとげていることが特徴である．地方名は，スルメイル(Surmeir)．ユリア(Julier, 2,284 m)峠からの源流は，サヴォーニン(Savognin)，ティーフェンカステル(Tiefencastel)などの町を抜けて裏ライン川に合流するが，古代からの峠越えでイタリアに向かう道も，それに沿っている．

ロマンシュ語の中では，ライン川渓谷の系統と別に，イン(Inn)川渓谷のエンガディン(Engadin；ロマンシュ語名はエンジャディーナ Engiadina)地方の方言群が，1つのグループを形成する．ユリア峠の南にあるマローヤ(Maloja, 1,815 m)峠から東に80キロメートル伸びるエンガディン地方は，東西に2分され，サン・モリッツ(St. Moritz)を中心とする西半分を高地エンガディン(Engiadin'ota)地方，シュクオル(Scuol)を中心とする下流の東半分を低地エンガディン(Engiadina bassa)地方とよぶ．

前者の方言はビュテール語(puter)，後者の方言はヴァラーデル語(vallader)で，方言差は小さく，2つをまとめてラディン語(ladin)という名称をもつ．低地エンガディン地方のツェルネッツ(Zernez)から峠を越えて南のイタリア領に連なるミュスタイル(Müstair)渓谷の言語は，ヴァラーデル語に属する．低地エンガディン地方では，ロマンシュ語はルマンチュ(rumantsch)，高地エンガディン地方では，ルマンチュのほかに，ルマインチュ，ルメーンチュ(綴りは rumauntsch)という呼称があるが，一般に，ラディンの名称を好む．ただし，この名称は，イタリア北部，ドロミテ地方のラディン語と同じであり，どちらもレト・ロマンス語に属するが，同一の言語ではないので，注意を要する．

エンガディン地方は，上述の2つの町が鉱泉をもつことから，ローマ時代から，保養地として，地中海世界とゲルマン世界を結ぶアルプス山中の中継地点の役割を担ってきた．特に，固有のレチア(Raetia)民族の伝統文化と，これをローマ化した地中海・イタリア文明との融合が強くみられる．ルネッサンス期には，イタリアから，文芸，建築，装飾，生活様式を受け入れたが，宗教的には，北のプロテスタント運動の影響を受けて，新教化した．1560年には，高地エンガディン地方のサメーダン(Samedan)に生まれたビフルン(J. Bifrun)が，初めて，新約聖書をロマンシュ語に翻訳した．以来，サメーダンがロマンシュ語文化振興の中心地となり，『ラディン語新聞』(*Fögl ladin*)が刊行されている．

以下に，高地エンガディン地方のビュテール語を中心にとり上げて，ロマンシュ語の特徴を記述する．

［音　韻］　ロマンシュ語ビュテール方言は，レト・ロマンス諸語の中でも，母音，子音ともに音素の数が多いことが特徴的である．鼻母音はない．

1）母　音　表1を参照．

〈表 1〉 ロマンシュ語の母音体系

（ビュテール語）

i	y	u
e	ö	o
ɛ		ɔ
	a	

単母音の体系は，9個の音素からなる．円唇中舌母音のあることでフランス語の母音体系に似ており，ö で表わした音素は，その位置により，相補的に [øː] [œ] として現われると解釈される．

また，開音節では一般的に長母音となるが，閉音節でも，長短の量的対立を示す場合がある．

(eau) pos [pos]「(私は)休む」

(il) pos [poːs]「休息」

二重母音は豊富で，13個ある．そのうち，第2要素に強まりのある上昇的二重母音は [je, u̯a, u̯e, u̯i]，第1要素に強まりのある下降的二重母音は [aj̣, au̯, ɛj̣, ou̯, uj̣, ua̯, ya̯, ia̯, ea̯] である．

綴字法で注目すべきは，aun が [ɛːm] と発音されることである．

rumauntsch [rumɛːmtš]「ロマンシュ語」

vaun [vɛːm]「(彼らは)行く」

三重母音 ieu の綴りは，ビュテール語(p.)では二重母音 [iːa̯]，ヴァラーデル語(v.)では三重母音 [i̯ɔu̯]，または，二重母音 [i̯ɔ] と発音される．

Dieu「神」(p.) [diːa̯]，(v.) [di̯ɔu̯, di̯ɔ]

人称代名詞1人称単数主格形の eau「私は」は，[eːa̯] または [aja̯]（サメーダン市内）と発音される．

2）子　音　表2を参照．

〈表 2〉 ロマンシュ語の子音体系

（ビュテール語）

	両唇音	唇歯音	歯茎音	口蓋音	喉音
閉鎖音	p/b		t/d	k/g	
破擦音			ts/dz		
			tś/dź		
			tš/dž		
摩擦音		f/v	s/z	ç/j	h
			š/ž		
鼻　音	m		n	ɲ	
側　音			l	ʎ	
ふるえ音			r		

閉鎖音と摩擦音の系列のほかに，3種類の破擦音があって，互いに対立していることが特徴的である．

(el) pisa [piza]「(彼は)考える」

(la) pizza [pidza]「山頂」

(el) picha [pitśa]「(彼は)たたく」

(la) pischa [piša]「尿」

綴りでは，ce, ci が [tse, tsi]，ch（ただし，中央グラウビュンデン地方では tg）が [tś]，sch が [š] または [ž]，tsch が [tš]，dsch が [dž]，s-ch が [štś] に対応する．

［形　態］　レト・ロマンス語全体に共通する通時論的特徴として，ラテン語の屈折語尾の -S が保存される傾向がある．これは，ロマンス諸語を東西に分けた場合に，西のグループに属させる根拠となるが，ロマンシュ語においても，この傾向は，名詞，形容詞，冠詞，代名詞などに広くみられる．以下，例をあげる．

1）複数語尾の -s は，ラテン語の対格複数の語尾が残存したものである．

an「年」/ans, bun「良い」/buns, il（冠詞男性形）/ils, nos「われわれ」, als「彼らを」

2）男性名詞主格単数の -s は，ラテン語の格標識の部分的痕跡として，ロマンシュ語に残されている．ビュテール語では，特定の語(bap「父」, frer「兄弟」)の前におかれる所有形容詞男性単数が，主格の -s を保存し，mieus「私の」, tieus「君の」, sieus「彼(女)の」となる．

mieus frer「私の兄(弟)」(スルシルヴァン語でも，meis frar となる．cf. ラテン語 MEUS FRATER)

古語法であるが，「神」は，主語・呼格 Deus と斜格 Dieu の区別があった．スルセルヴァ地方では，現代でも，Dieus/Diu として対立している．このスルシルヴァン語では，形容詞が属詞として用いられた場合に，男性単数名詞の主語に一致して，-s を付ける．

Il mir ei alfs.「壁は白い」

(il：定冠詞男性単数形「その」, mir：名詞男性単数形「壁」, ei：動詞直説法現在3人称単数形「～である」, alfs：形容詞「白い」の男性主格単数形) cf. ラテン語 MURUS EST ALBUS.

ロマンシュ語の動詞は，他のロマンス諸語と同様に，法，時制，態，人称，数に応じて活用するが，形態上，体系の単純化がみられる．

規則動詞では，不定法形の -er 型と -ir 型に大別される．表3に，直説法現在形の活用例をあげる．

〈表 3〉 直説法現在形の活用(規則動詞)

		salüder「挨拶する」	cusir「縫う」
単 1	(eau)	salüd	(eau) cus
2	(tü)	salüdast	(tü) cusast
3	(el)	salüda	(el) cusa
複 1	(nus)	salüdains	(nus) cusins
2	(vus)	salüdais	(vus) cusis
3	(els)	salüdan	(els) cusan

2人称単数と1人称複数は，語尾に，それぞれ -ast, -ains ないし -ins をとるが，これは，ラテン語の動詞の変化語尾に人称代名詞が付いたものである(次例は，-er 型)．

-AS + TU > -ast, -AMOS + NOS > -ains

［統　語］　統語法の主な特色をあげると，次のとおりである(文例は，特に断らない限りビュテール語)．

1）動詞の直接目的語が「人間」を示す場合には，前置詞 a を介在させる．

La figlia ho salüdo a Peider (a me).

「娘はペイデルに〔私に〕挨拶をした」
(la：定冠詞女性単数形「その」，figlia：名詞女性単数形「娘」，ho：助動詞 avair の直説法現在3人称単数形，salüdo：動詞 salüder「挨拶をする」の過去分詞男性単数形，a：前置詞「～を，～に」，Peider：人名，me：人称代名詞1人称目的格「私を」)

2）代名動詞の複合時制において，エンガディン地方ラディン語では，スペイン語などのように，avair (<HABERE)をとる．

Els s'*haun* impissos.
「彼らは考えた」
(els：人称代名詞3人称複数主格形「彼らは」，s'：再帰人称代名詞3人称 as の縮約形，haun：助動詞 avair の直説法現在3人称複数形，impissos：動詞 impisser「考える」の過去分詞男性複数形)

他のロマンシュ語方言では，フランス語，イタリア語のように，esser (<ESSE) を用いる．どちらの場合も，過去分詞は，再帰代名詞の性，数に一致する．

3）ピュテール語は，未来形としては，共通ロマンス語的形成である CANTARE(「歌う」)+HABEO (「持つ」)をもつ．つまり，ラテン語の未来形の活用語尾である -AM, -ES, -ET などを失ったため，他のロマンス諸語と同様，動詞の不定形に助動詞(HABEO)を付けて，未来の意味を表わすようになったのである．ほかに，このような迂言的未来時制の型として，VENIO(「来る」)+(A+)CANTARE と VOLEO(「欲する」)+CANTARE があるが，これらは，叙法的意味を伴う．

Eau chantaro.「私は歌うだろう」
Eau vegn chanter.「私は(これから)歌う」
Eau vögl chanter.「私は歌う(つもりだ)」

他のロマンシュ語方言では，VENIO+(A+)CANTARE の型が一般的である．スルシルヴァン語の例をあげる．

Jeu vegnel a cantar.「私は歌うだろう」

ピュテール語では，さらに，「不確実性，意図」を表現する CANTARE＋*HEGIA (ラテン語 HABEO の接続法現在から)が，未来形として用いられることも多い．

Eau chantaregia.「私はたぶん歌うだろう」

4）条件法については，ロマンス諸語に広くみられるような，助動詞 HABEO の未完了形を後に付けた分析的形成，たとえば，CANTARE＋HABEBAM の型は発達していない．ラテン語と同様，接続法を用いて，条件文と帰結文がつくられる．

Eau gess a chesa, sch'eau füss liber.
「もし私は時間があれば家に行くのだが」
(eau：人称代名詞1人称単数主格形「私は」，gess：動詞 ir「行く」の接続法未完了1人称単数形，a：前置詞「～に」，chesa：名詞女性単数形「家」，sch'：接続詞 scha「もし」の縮約形，eau：同上，füss：動詞 esser「～である」の接続法未完了1人称単数形，liber：形容詞「自由な，暇な」の男性単数形)

5）受動態は，ラテン語の受動態活用語尾の -OR, -ARIS, -ATUR などが消滅したため，「来る，なる」の意味をもつ動詞 VENIO を助動詞として用いて分析的に形成された．VENIO＋AMATUS(「愛された」)の型が一般的で，共通ロマンス語的な SUM(「である」)＋AMATUS の型は，16世紀頃から衰退の一途をたどっている．これには，ドイツ語の werden+過去分詞が影響を与えたとされている．

(ピュテール語) Eau vegn clamo.「私は呼ばれる」
(eau：人称代名詞1人称単数主格形「私は」，vegn：受動の助動詞 gnir の直説法現在1人称単数形，clamo：動詞 clamer「呼ぶ」の過去分詞男性単数形)
(スルシルヴァン語) Jeu vegnel clamaus.「同」
(ドイツ語) Ich werde gerufen.「同」

6）語順の点では，ドイツ語傍層の影響として，主語と動詞の倒置があげられる．副詞(相当語句)や状況補語が文の第1位置におかれると，動詞はすぐ後の第2位置にくる．

Els vendan frütta a la staziun.
A la staziun vendan els frütta.
「彼らは駅で果物を売っている」
(els：人称代名詞3人称複数主格形「彼らは」，vendan：動詞 vender「売る」の直説法現在3人称複数形，frütta：名詞「果物」，a：前置詞「～で」，la：定冠詞女性単数，staziun：名詞「駅」)

[語　彙]　ロマンシュ語は，ラテン語の古形を多くとどめている(以下の例は，ピュテール語)．

CODICE「本」> cudesch
ALBU「白」> alf
PLACITU「ことば」> pled

その反面，イタリア語およびドイツ語からの借用語を受け入れている．

ド．Wald「森」> vaut, god
ド．Stube「居間」> stüva

特に，最近では，ドイツ語から技術用語が数多くもたらされ，ゲルマン語系語彙の比重を高めているので，これに対し，ロマンシュ語で新語を造語する必要に迫られている．

このために，ロマンシュ語では，方言間の差異を埋めるような共通語の創造を模索している．現在，文章語については，rumantsch grischun「グラウビュンデン・ロマンシュ語」として，語彙，文法，正書法の面で，統一的規範を設ける試みがなされている．

[辞　書]

Bezzola, R. R. e R. O. Tönjachen (1976), *Dicziunari tudais-ch-rumantsch ladin* (Lia Rumantscha, Chur)
Dicziunari Rumantsch Grischun (publichà da la Società Retorumantscha, Chur, 1939–)——ロマンシュ語言語学・文献学上，もっとも権威のある辞書．1991年現在，Iの項目まで刊行されている．
Mani, C. (1977), *Pledari da la Sutselva* (Ligia Romontscha, Chur)
Peer, O. (1962), *Dicziunari rumantsch ladin-tudais-ch* (Lia Rumantscha, Chur)
Planta, R. von und A. Schorta (1939–64), *Rätisches Namenbuch* I, II (Francke, Bern)
Sonder, A. e M. Grisch (1970), *Vocabulari da Surmeir rumantsch-tudestg / tudestg-rumantsch* (Lia Rumantscha, Chur)
Taggart, G. (1990), *Dicziunari dal vocabulari fundamental, rumantsch ladin vallader-frances e frances-rumantsch ladin vallader* (Lia Rumantscha, Cuoira)
Velleman, A. (1929), *Dicziunari scurzieu da la lingua ladina cun traducziun tudais-cha, francesa ed inglaisa* (Engadin Press, Samedan)
Vieli, R. ed A. Decurtins (1962), *Vocabulari romontsch sursilvan-tudestg* (Ligia Romontscha, Chur)
——— (1975), *Vocabulari romontsch tudestg-sursilvan* (Ligia Romontscha, Chur)

[参考文献]

1）文法書，入門書

Arquint, J. C. (1974), *Vierv ladin. Grammatica elementara dal rumantsch d'Engiadina bassa* (Lia Rumantscha, Chur)
Ganzoni, G. P. (1977), *Grammatica ladina. Grammatica sistematica dal rumantsch d'Engiadin'Ota* (Lia Rumantscha, Chur)
——— (1983), *Grammatica ladina. Grammatica sistematica dal rumantsch d'Engiadina Bassa* (Lia Rumantscha, Chur)
Velleman, A. (1915–24), *Grammatica ladina d'Engiadin'ota* I, II (Stamparia engiadinaisa, Samedan)

2）書誌，雑誌

Annalas da la Società Retorumantscha (Società Retorumantscha, Chur / Samedan, 1886–)
Bibliografia Retoromontscha I (*1552–1930*), II (*1931–1952*) (Ligia Romontscha, Chur/Samedan, 1954)
Bibliografia Retorumantscha (*1552–1984*) *e Bibliografia de la musica vocala retorumantscha* (*1661–1984*) (Lia Rumantscha, Chur, 1986)
Studis romontschs 1950–1977 I, II (Società Retorumantscha, Cuera, 1977)

3）概説書，研究書

Gartner, Th. (1910), *Handbuch der rätoromanischen Sprache und Literatur* (Halle)
Gregor, D. (1982), *Romontsch. Language and Literature* (Oleander Press, Cambridge / New York)
Holtus, G., Metzeltin, M. und Ch. Schmitt (eds.) (1989–), *Lexikon der Romanistischen Linguistik* (Max Niemeyer, Tübingen)
Mützenberg, G. (1974), *Destin de la langue et de la littérature rhéto-romanes* (L'Age d'Homme, Lausanne)
Präder-Schucany, S. (1970), *Romanisch Bünden als Selbständige Sprachlandschaft* (Francke, Bern)

4）民間伝承，文学作品集

Decurtins, C. (ed.) (1888–1929), *Rätoromanische Chrestomathie* I–XIV (Erlangen ; repr. 1983–85, Octopus, Chur)
Bezzola, R. R. (ed.) (1910), *Litteratura dals rumauntschs e ladins* (S. Tanner, Samedan ; repr. 1979, Lia Rumantscha, Chur)
Lansel, P. (ed.) (1950), *Musa rumantscha* (Lia Rumantscha, Chur)

[参　照]　ロマンス諸語，レト・ロマンス諸語，ラディン語

(富盛　伸夫)

ロマンス諸語　英 Romance languages, 仏 langues romanes, 独 romanischen Sprachen, 伊 lingue neolatine

[概　説]　インド・ヨーロッパ(印欧)語族の一分派であるイタロ・ケルト語派の系統に属し，イタリア半島中部ラティウム(Latium)地方の言語であったラテン語(Latin)を起源として分化した言語グループの総称．推定言語人口は，5億8千万人とされる．

現在，国語としての地位をもつロマンス諸語は，ヨ

亀井孝他 編『言語学大辞典』(世界言語編)

(倍賞　和子)

れ

レッツェブルク語　Lëtzebuergesch, 独 Letzeburgisch

レッツェブルギッシュ(語)ともいう.

＝ルクセンブルク語

レット語　英 Lettish

＝ラトヴィア語

レト・ロマンス諸語　ロマンシュ retorumantsch, 英 Raeto-Romance, 仏 rhétoroman, 独 Rätoromanisch, 伊 retoromancio

上記のほかに，イタリア語で，レト・ロマンス諸語を総称して，ladino とよぶ場合がある.

［概　説］　レト・ロマンス諸語は，インド・ヨーロッパ語族のロマンス諸語に属し，スイス東南部のグラウビュンデン(Graubünden)州と，イタリア北部のドロミテ(Dolomite)地方と，イタリア北東部のフリウリ(Friuli)平野の，3つの地域で話される言語群の総称である.

言語人口は，推計，60万人前後とされる.

アルプス山岳地帯の先住民族であるレチア人(Raeti)の言語が，帝政ローマ期にラテン語化して形成された，とするのが通説であるが，言語基層については不明な点が多い．スイス，イタリアのアルプス高原地方は，北のゲルマン語圏と南の地中海ローマ文明圏を結ぶ交通の枢軸であり，四方を強力な国家に囲まれて，戦略防衛上の要衝でもあった．これらの3地域は，外に開かれているとともに自立的な生活圏を保っていたが，地理的に隣接しておらず，また，歴史的にも，共通語や標準語が形成されなかったために，現在も，きめわめて細かな方言群に分かれている．このため，他のロマンス諸語と区別する共通的特徴と分類の問題が，レト・ロマンス語系言語を研究する上で，大きな課題となっている.

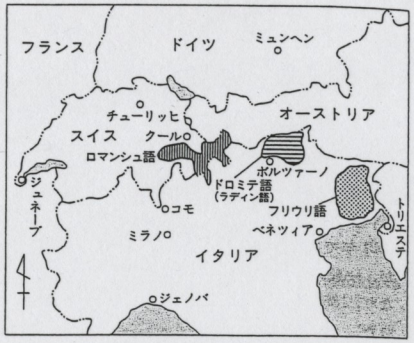
［方言分布と言語状況］　レト・ロマンス諸語の話される3地域とその方言名を，西から東へ列挙すると，以下のとおりである(〈図〉を参照).

1）スイス，グラウビュンデン州：ロマンシュ語(英 Romansh, 独 Bündner Romanisch, 仏 romanche, 伊 romancio, 自称については，以下を参照)

a）スルセルヴァ(Surselva)地方：スルシルヴァン語(sursilvan)

b）スットセルヴァ(Sutselva)地方：スットシルヴァン語(sutsilvan)

〈図〉　レト・ロマンス諸語地域



c）スルメイル(Surmeir)地方：スルミラン語(surmiran)

d）エンガディン(Engadin)渓谷地方：ラディン語(ladin)

高地エンガディン地方：ピュテール語(puter)

低地エンガディン地方，ミュスタイル(Müstair)地方：ヴァラーデル語(vallader)

2）イタリア，ドロミテ地方：ドロミテ語，自称はラディン語(ladin)

a）バディーア(Badia)渓谷地方：バディオット語(badiot)

b）ガルデーナ(Gardena)渓谷地方：ガルダイナ語(gherdëina)

c）ファッサ(Fassa)渓谷地方：ファッサ語(fashan)

d）フォドム(Fodom)渓谷地方：フォドム語(fodóm)

e）コルティーナ・ダンペッツォ(Cortina d'Ampezzo)地方：カドリーノ語(cadorino)

3）イタリア，フリウリ地方：フリウリ語(furlan)

a）フリウリ平野中央および東部地方：共通フリウリ語(furlan comun)

b）フリウリ平野西部地方：西フリウリ語(furlan occidental)

c）カルニア(Carnia)地方：カルニア語(carnico)

以下，それぞれの言語状況について述べる.

1）スイス，グラウビュンデン州のアルプス地方

スイスのレト・ロマンス諸語は，ロマンシュ語(実際の発音と綴りのヴァリアントは，下記を参照)とよばれ，4方言群に分けられる.

言語人口は，グラウビュンデン州内で約3万7千人，他のスイス各地方に住む話者をあわせて，約5万人(スイス全人口の0.8%)とされる．1938年2月の国民投票によって，ドイツ語，フランス語，イタリア語に次ぐ，スイス第4番目の「国語」として，さらに最近になって少数言語擁護の世論が高まり，1996年3月の国民投票により「公用語」としていちおう認められている．しかし，さまざまな再生のための努力にもかかわらず，ドイツ語の侵食に従って，次第に，その勢力を失いつつあるのが現在の趨勢である.

小学校高学年からのドイツ語教育や，職業生活，マスメディアの影響で，ロマンシュ語の話者は，現在では，ほぼ完全に，ドイツ語との二言語併用者となっている．18世紀以来，共通ロマンシュ語の必要性が認識され，中間地帯のスルミラン語を中心言語として，さまざまな試みがなされてきたが，特に最近は，文章語のレベルで，統一ロマンシュ語(Rumantsch Grischun)の開発と普及が進められている.

a）スルセルヴァ地方――方言名は，スルシルヴァン語．グラウビュンデン州の州都クール(ドイツ語名 Chur，ロマンシュ語名 コイラ Coira，または，クエラ Cuera)から東に入るライン川源流地帯の谷で，中心地は，中世からベネディクト派の修道院があって栄えたディセンティス(ドイツ語名 Disentis，ロマンシュ語名 ムシュテールMustér)の町である．ルネッサンス時代には，いち早く，ロマンシュ語の印刷がここで行なわれ，以後，言語文化の擁護運動の中心となっている．ロマンシュ語では，ロモンチュ(romontsch)とよばれ，語彙，統語法ともに，隣接するドイツ語の影響が強い.

b）スットセルヴァ地方――方言名は，スットシルヴァン語．フリムス(Flims)の森を隔てて，スルセルヴァ地方の下流に位置する一帯．イタリアに抜ける峠道が南にあるため，中世末期からドイツ語の侵入が著しく，4地方の中でも，もっとも非ロマンシュ語化が進んでいる.

中心地のトゥシス(Thusis)は，完全にドイツ語化されて，言語上は，イランツ(Ilanz)が中心地となっている．ロマンシュ語では，ルマンチュ(rumàntsch)とよばれる.

c）スルメイル地方――方言名は，スルミラン語．ユリア(Julier)峠から発するライン川の源流のひとつの流域で，交通の要所であるティーフェンカステル(Tiefencastel)やサヴォーニン(Savognin)を中心とする．西のスットシルヴァン語と近い特徴を示すために，「中央ロマンシュ語」としてまとめられることが多い．ロマンシュ語では，ルマンチュ(rumantsch)とよばれる.

d）エンガディン(ロマンシュ語名 エンジャディーナ Engiadina)地方――ドナウ川水系イン(Inn)川の源流地帯で，避暑地サンモリッツ(St. Moritz，ロマンシュ語名サンミュレッツァン San Müreczan)を中心とする高地エンガディン(Engiadin'ota)地方と，同じ谷の下流地域のシュクオル(Scuol)を中心とする低地エンガディン(Engiadina bassa)地方とに分かれる．前者の方言はピュテール語で，ロマンシュ語名は，ルメーンチュ(rumauntsch)とよばれる．その言語文化的中心はサメーダン(Samedan)にあり，活発な復興運動が展開されている．後者の方言はヴァラーデル語，ロマンシュ語名は，ルマンチュ(rumantsch)である．また，言語的特徴からは後者に属する小方言が，オフェン(Ofen)峠を南に越えてイタリアとの国境に接するミュスタイルの谷にある．一般に，スイスでは，これらの諸方言をまとめて，ラディン語(ladin)とよぶのが慣例となっているが，イタリア人が，下記のドロミテ諸方言を，ラディーニ(ladini)，ないし，現地名でラディン(ladin)と，あるいは，レト・ロマンス諸語を総称して，ラディーノ(ladino)とよぶ場合が一般的なので，それらと区別せねばならない.

2）イタリア北部のドロミテ地方　スイス・ロマンシュ語の話されるグラウビュンデン州の南端から東に，直線距離で約100キロを隔てて，ドロミテ諸語地域がある．方言分布は，セルラ(Sella)山塊を中心にして，トレンティーノ・アルト・アディージェ(Trentino-Alto Adige)自治州と，その東に隣接するヴェネト(Veneto)州の山岳地帯にまたがり，細かくは，5つの谷に分類される．話者自身によるこの地域全体の言語に対する呼称として，ラディン(ladin)が用いられるが，上記，スイスのラディン語との混同を避けるために，ドロミテ・ラディン語とよばれる場合が多い．ここでは，簡潔に，ドロミテ語と総称することにする．チロル・アルプスの南端に位置し，中世から現代にいたるまで，強力なドイツ語圏とイタリア語圏の間で谷ごとに分断されたまま，辺境言語の歴史をたどってきた．第1次大戦後は，イタリアに併合されて3県に分割されたため，標準語形成の機会を失ってしまった．ほとんどの話者が，イタリア語との二言語併用者，あるいは，ドイツ語を加えて三言語併用者である．ドロミテ語の言語人口は，資料のとり方によって1万人から7万人までの幅があるが，推計，約2万5千人から3万人の間であると考えられる.

a）バディーア渓谷地方――方言名は，バディオット語．トレンティーノ・アルト・アディージェ州，ボルツァーノ(Bolzano)県に属し，ここでは，行政，教育，教会などで，方言の使用が公けに認め

「セレクション・ヨーロッパの言語」(三省堂，1998年)

られている．険しい地理的環境にあるため，長い間，中央イタリアからの「トスカーナ語化」の影響を被らなかった．そのため，歴史的な保守性が顕著で，ドロミテ・ラディン語の典型的な特徴を多く示す．しかし，隣接する言語文化圏は，むしろドイツ語であり，その影響は無視できない．文化的中心地は，サン・マルティーノ(San Martino)である．

b）ガルデーナ渓谷地方——方言名は，ガルダイナ語．セルラ山塊から西に伸びてイザルコ(Isarco)川に合流するこの渓谷は，地形が穏やかで，しかも，古くから木製玩具の製造を産業としてもっていた．このため，交通が頻繁で，言語的にも均質であり，人口の9割以上が，この方言を母語としている．バディーア地方と同様，ドイツ語からの影響が大きい．中心地は，オルティゼイ(Ortisei)である．

c）ファッサ渓谷地方——方言名は，ファッサ語．セルラ山塊から南西に伸びる谷は，トレント(Trento)県に属し，隣接する北イタリアのヴェネト語(veneto)の影響が，音韻から構文上まで強くみられる．モエーナ(Moena)を中心に，75パーセント以上が，ファッサ語の話者である．

d）フォドム渓谷地方——方言名は，フォドム語．セルラ山塊の南東，リヴィナルロンゴ(Livinallongo)地方は，ヴェネト州，ベルルーノ(Belluno)県に属し，約90パーセントの住民が，この方言を母語としている．

e）コルティーナ・ダンペッツォ地方——方言名は，カドリーノ語．フォドム地方と同じ行政区分に属するが，人口の30パーセントしかこの方言の話者はいない．ここでは，いかなる法的，公的な地位も与えられておらず，ヴェネト語に従属している．

3）イタリア，フリウリ地方　行政区分上は，フリウリ・ヴェネチア・ジュリア(Friuli-Venezia Giulia)自治州にあり，州都は，19世紀に，ヴェネト語によって非フリウリ語化されたトリエステ(Trieste)である．フリウリ語は，主に，中央の平野部に残され，言語人口は50万人を越えるが，公けの場や義務教育の言語とはなっておらず，地域語としての地位は低いと言える．歴史的に，フリウリ語は，隣接するヴェネト語の絶えざる影響を強く受けており，多くの共通の要素を見いだすことができる．日常的に，大部分の住民は，ヴェネト語との二言語併用状態にある．さらに，今世紀になって積極的に進められた「イタリア化」政策によって，特に，都市部では，公的には，イタリア語がフリウリ語を駆逐してしまった．また，イタリア国境内部でも，周辺部では，北のドイツ語，東のスロベニア語と接触しており，若干の語彙的要素を受け入れている．しかし，現在でも，一般に，民衆の間では，フリウリ語のメディアが好まれ，文学活動も活発である．フリウリ語の言語学的研究は，主に，ウディネ(Udine)大学と，西のパドヴァ(Padova)大学でなされ，フリウリ地方の言語地図も刊行されている．

a）フリウリ平野中央および東部地方——東部方言は，フリウリ語諸方言の共通語(コイネー)的役割(furlan comun)を果たしており，中心地はウディネである．ここには，大学のほか，フリウリ語文献協会が出版・啓蒙活動を行ない，伝統的言語文化の擁護に努めている．この方言は，強勢音節の強位置／弱位置により，語末母音の長／短の音韻論的対立(iː/i, eː/e, etc.)をもつのが特徴である．

b）フリウリ平野西部地方——平野を北から南に流れ，アドリア海に注ぐタリャメント(Tagliamento)川を隔てて，西の半分が，フリウリ語西部方言(furlan occidental)地域である．海岸地帯とともに，ここでは，特に，ヴェネト語との干渉現象が著しい．東部方言の長母音／短母音の対立はなく，スイスのエンガディン地方のラディン語のような下降二重母音との対立(i, a, u, ei̯, ou̯)となる．

c）カルニア地方——フリウリ平野の北で，オーストリア国境に近い山間部のフリウリ語は，カルニア方言とよばれ，音韻，語彙の面で独自の特徴を示す．強位置／弱位置による音韻論的対立は，西部方言と同じタイプをもつ．カルニア語は，3つの小さな谷に分かれて存在し，中心地や共通語はもたない．

［系統論争と名称］　レト・ロマンス語が他の言語との間にもつ類似性を発見し，書物の形にまとめたのは，スイスのエンガディン地方出身で，イギリス大英博物館の司書をしていたプランタ(J. Planta)であった．彼は，1776年に，フランス語最古の文献『ストラスブールの宣誓』(*Serments de Strasbourg*, 842)と，エンガディン地方のロマンシュ語方言であるラディン語を比較して，その相似性を指摘した．その後，1790年に，スラブ系学者のカルリ(J. R. Karli)は，聖書の『創世紀』の冒頭部分について，やはり，エンガディン地方のラディン語とフリウリ語との両方の翻訳文を対照して，その類似性を根拠に，これらが同一の言語に属する2方言ではないかと結論した．さらに，フリウリ語が，ラテン語 KA- の口蓋化，複数を示す語末屈折語尾の -s など，フランス語との共通点をもつことから，イタリア語より，フランス語に近いことを主張した．現代のロマンス語学で言う「西ロマニア」的特徴である(後述参照)．

19世紀後半に，史的音声学の方法が精密になってくると，レト・ロマンス諸語の内的一体性を証明しようという試みがなされた．当時のオーストリア領ドロミテ地方の方言を研究していたシュネッラー(Ch. Schneller)と，スイス，グラウビュンデン州のロマンシュ語諸方言を研究していたラウシュ(F. Rausch)は，ともに1870年，フリウリ語とそれぞれの言語が同一言語群を形成すると論じた．これらの主張を受けて，1873年に，フリウリ地方出身のイタリア人方言学者アスコリ(G. I. Ascoli)は『ラディン語試論』(*Saggi ladini*)を著し，そこで，3つの地域の言語が1つの言語群に属するという学説をたてた．本格的なレト・ロマンス語学は，アスコリから始まったと言える．イタリア人学者によって，レト・ロマンス語が「ラディン語」という名称でよばれるのは，アスコリにならってのことである．ただし，バッティスティ(C. Battisti)やサルヴィオーニ(C. Salvioni)など，イタリア人学者の多くは，レト・ロマンス諸語に，独自の言語グループとしての自立性を与えず，イタリア北部のガロ・イタリア語系かヴェネト語系の方言に連なるものであるという立場をとった．したがって，この点により，3つの言語群にそれぞれ独立した地位を与え，さらに，レト・ロマンス語として系統的一体性をうちたてようとした，スイスやドイツのロマンス語学者たちと鋭く対立した．この論争の背景には，第1次大戦前後から，ドイツ，オーストリアに対して，南チロルをめぐってイタリア国内でナショナリズムが勃興しつつあった反面，他方，スイス人側では，イタリア側の領土拡大，併合の野望を警戒した，自衛の意識がはたらいていたという状況があった．ロマンシュ語を，国の正式な言語として認めるという，1938年のスイス国民投票による決定は，このような歴史的文脈の中でなされたのである．

レト・ロマンスという名称は，古代ローマ人によって，スイス，アルプス地方一帯からドイツ南部にかけての地域に対して付けられた地方名「レチア」(または，ラエティア Raetia)と，「ロマンス」(<ラテン語 ROMANICE)という言語系統名との合成語である．この名称は，19世紀の初め，スイス人で，ディセンティスに住むベネディクト派の修道僧であった，プラチア・シュペッシャ(Placia Spescha)によって用いられた．ドイツ語では，フランス語やイタリア語などを含む「ロマンス語」を示す Romanisch が，スイスの「ロマンシュ語」を表わすのにも使われていたため，誤解が生じやすく不便であった．そこで，古代の地方名ないしは民族名を付けて，Räto-romanisch とすることによって，区別を容易にしたのである．その後，スイスを中心に，この便利な名称が広まったが，スイスの「ロマンシュ語」を言う場合にも，広義の「レト・ロマンス諸語」を総称して言う場合にも使われるという，第2の不都合が生じた．最近では，狭義のスイス・ロマンシュ語に対しては，ドイツ語で Bündner Romanisch「グラウビュンデン州ロマンシュ語」と言って，区別をするようになっている．

しかし，この「レト・ロマンス語」という命名には，歴史的事実に反する誤りがある．すなわち，古代民族のレチア人は，スイス・アルプスから北のドイツにいたる平野地方にも居住していたことは，地名などから確認されているものの，イタリア北部のドロミテ地方，さらに，東のフリウリ平野地方にまで広く分布していたとは考えられない．これらの地方は，ローマ時代には「ノリクム(Noricum)」とよばれ，レチアには含まれていなかったからである．したがって，レチアという地方名ないし民族基層を共有しないドロミテ語やフリウリ語にまで，「レト・ロマンス」の名を与えるのは問題であろう．同様に，ブルシエ(E. Bourciez)のように，langues rhétiques「レチア諸語」としてまとめることも，同じ理由から誤解を生ずる．

また，ガミルシェク(E. Gamillscheg)は，アルプス固有の語彙や地名を根拠に，Alpenromanischen「アルプス・ロマンス諸語」という名称を与えたが，平野部のフリウリ地方はやはり排除され，また，アルプス山脈南西部のフランス・アルプスまで含んでしまうので，不適当である．アルプス地方一帯をおおう古代の民族・言語基層の存在は認めるにしても，現代の「レト・ロマンス」語地域とは一致しないのである．

他方，イタリア人学者のほとんどは，レト・ロマンス諸語全体をさすのに，ドロミテ語の自称である「ラディン語(ladin)」に相当する ladino (複数 ladini)を用いている．しかし，この語 ladin (<LATINU)は，狭義のドロミテ・ラディン語の名称として用いられるほかに，スイス，グラウビュンデン州，エンガディン渓谷地方のロマンシュ語の自称でもある．さらに，「ラディーノ(ladino)」は，中米で，原住民にとっての外国語，つまり，スペイン語を意味し，その言語を理解する「白人とインディオとの混血の人」をさすこともある．また，場合によっては，ユダヤ系の人々の話す「ロマンス語」の意味になることもある．したがって，このように多義である「ラディン」を，レト・ロマンス諸語全体の総称とすることは避けるべきであろう．

レト・ロマンス諸語の話される3地域の両端をとって，ベック(P. Bec)は，rhéto-frioulans「レト・フリウリ諸語」という命名をしているが，内容的な妥当性は認められるにしても，まだ，一般的な名称とはな

っていない．

名称の問題は，この言語群が，果たして，ひとつの系統的な，あるいは，類型的な一体性をもつかどうかの点にもかかわってくる．「レト・ロマンス」系言語という名称を用いる場合，「イベロ・ロマンス」「イタロ・ロマンス」「バルカン・ロマンス」「ガロ・ロマンス」と並列におかれて，ロマンス諸語の一大言語群としての位置づけをすることになる．「ガロ・ロマンス」的特徴を多くもつレト・ロマンス語が，それとは別に独立したグループを形成するかどうかについては，議論の多いところである．

［言語特徴］　レト・ロマンス語は，数多くの方言群の総称であり，ひとつの言語に代表させて，その特徴を網羅することはできない．以下に，レト・ロマンス語を1つの言語群としてまとめる特徴のみを掲げる．下位言語グループについての個別的な記述は，「ドロミテ語」「フリウリ語」「ロマンシュ語」の各項目を参照されたい．

I）音　声　アスコリの研究以来，レト・ロマンス諸語の共通的特徴として，一般に，次の4点があげられる．

1）語末屈折語尾 -S の保存．

2）語頭子音群 PL-, BL-, KL-, GL-, FL- の保存．

3）KA-, GA-, U, A に起こる口蓋化現象．

4）特殊な二重母音化現象．

これらの通時的現象は，ガロ・ロマンス系あるいはガロ・イタリア系言語にも，ある程度は共通してみられるものであるが，レト・ロマンス諸語においては，さらに際立った特殊性が指摘されうるのである．

1）ラテン語の語末屈折・活用語尾の -S の保存

レト・ロマンス語地域では，ラテン語の語末子音 -S は，発音上，消滅せずに残存した．そのために，イタリア語地域とは対照的に，この -s が文法機能の標識として機能しつづけている．名詞，形容詞等の複数は，ラテン語の対格複数から形成される．この複数を示す形態素 -s は，フランス語，スペイン語，ポルトガル語など，ロマンス諸語のうちで，「西ロマニア」の言語グループが共通してもつ特徴とされる．他方，イタリア語，ルーマニア語は，ラテン語の主格複数から複数形を受け継いでおり，「東ロマニア」のグループを形成する．レト・ロマンス語は，イタリア北部のロンバルディア方言と同じく，この点で，「西ロマニア」系の言語であると言える(表1を参照)．

ただし，ドロミテ・ラディン語とフリウリ語では，一部の名詞が，対格複数からの -S ではなくて，イタリア語のように，主格複数からの -I を受け継いでいることが注目される．たとえば，ドロミテ・ラディン語の子音で終わる男性名詞のいくつかは，複数形に

〈表1〉　ラテン語の屈折・活用語尾 -S の保存

	主格		対格	
ラテン語	（単数）	（複数）	（単数）	（複数）
「年」	ANNUS	ANNI	ANNUM	ANNOS
東ロマニア				
イタリア語	anno	anni		
ルーマニア語	an	ani		
西ロマニア				
レト・ロマンス語			an/on	ans/ons
フランス語			an	ans
スペイン語			año	años

-i のあった形跡をうかがわせる語尾をとる．

/nes/「鼻」(単数)：/neš/（複数）(<*nes-i)

人称代名詞の複数形も，-s を残している．

ラテン語 NOS, VOS > nus, vus (cf. イタリア語，ルーマニア語では，noi, voi).

動詞活用語尾の2人称に，-s を保存している．これも，「西ロマニア」的共通特徴である．これに対して，たとえば，イタリア語では，-i となっている．

ラテン語

BELLAS DOMINAS *LAUDAS*.

「君は美しい婦人たちを讃える」

レト・ロマンス語

（スルミラン）Tei *laudas* las bialas duonas.

（ヴァラーデル）Tu *lodast* las belas duonas.

フランス語

Tu *loues* les belles dames.

イタリア語

Lodi le belle donne.

2）ラテン語の語頭閉鎖子音に -L- が続く子音群の PL-, BL-, KL-, GL-, および，摩擦音の子音群 FL- は，ロマンス諸語の中で多様な進化をとげたが，ガロ・ロマンス系言語とレト・ロマンス語だけが，完全にそれらを保存した．この保守性は，レト・ロマンス語をガロ・ロマンス系言語の中に含めようとする立場の有力な論拠となる．

ラテン語 PLANTA「植物」>レト・ロマンス語(ヴァラーデル) planta, 仏 plante (cf. 伊 pianta)

ラテン語 CLAVE「鍵」>レト・ロマンス語(フリウリ) clâf, 仏 clef (cf. 伊 chiave)

3）口蓋化現象　ガロ・ロマンス語的特徴である，強勢母音 -A の前の K と G が口蓋化する傾向をもつ．しかし，レト・ロマンス諸語に一様にみられるのではなく，スルシルヴァン語のように，ka- をとどめているところもある．これは，近隣のドイツ語からの強い影響を受けてきたために，逆行現象が起きていると考

えられる．すなわち，ka- > k'a- > tśa- > ka-.

ラテン語 KA- : CAPRA「山羊」

イタリア語 ka- : kapra

レト・ロマンス語

（スルシルヴァン）ka- : kaura

（共通フリウリ）k'a- : k'avre

（ヴァラーデル）tśa- : tśavra

（ピュテール）tśe- : tśevra

（西フリウリ）tša- : tšavra

フランコ・プロヴァンス語 tša- : tšavra

フランス語 še- : šèvrə

このような共時的多様性は，必ずしも，口蓋化の通時的変化の各段階がそのまま残存しているのではないことは，地理的分布から明らかである．むしろ，隣接するドイツ語やヴェネト語からの傍層的干渉作用を原因とみる立場が有力である．

また，ケルト民族基層と関係づけて説明される，ラテン語 U > ü (=[y]) の前舌化が，フリウリ地方とドロミテ地方アディージェ渓谷を除くレト・ロマンス語全域にみられる．フランスや北イタリアに住んでいたと考えられるケルト系ガリア人の言語特徴であった口蓋化的傾向が，アルプス地帯にも認められることは，西部レト・ロマンス語をガロ・ロマンス系言語に含めようとする立場を補強するものである．

4）特殊な二重母音化現象　上記の口蓋化 U > ü は，スイス・ロマンシュ語スルシルヴァン方言では，前舌化傾向が強まり，U > ü > i となっている．この方言の東に隣接する中央グラウビュンデン地方（スットシルヴァン語とスルミラン語）では，この i が，二重母音化して ei と進化する．さらに，上流のベルギュン (Bergün) 地方では，ek という寄生子音に変化している．

ラテン語 MURU「壁」> 伊 muro ; 仏 mur [myr] ; レト・ロマンス語（エンガディン地方のピュテール）mür,（スルシルヴァン）mir,（スットシルヴァン，スルミラン）meir,（ベルギュン地方のピュテール）mekr

ラテン語の短母音 Ĕ, Ŏ の進化した広口母音 è[ɛ] と ò [ɔ] の二重母音化は，ロマンス諸語に広く発するので，一般に，「共通ロマンス的二重母音化」とよばれる．ところが，レト・ロマンス語領域内では，この変化は特殊な方向をとる．たとえば，エンガディン地方ピュテール語では，他の言語の上昇二重母音 (i̯e, u̯o など)に対して，逆に，下降二重母音(ei̯, ou̯)となる．また，スルシルヴァン語では，二重母音化しない．

ラテン語 MĔL「蜜」，俗ラテン語 *MÈLE > 伊 miele ; 仏 miel ; レト・ロマンス語(スルシルヴァン) mèl,（スルミラン）meal,（ピュテール）meil

俗ラテン語の狭口母音 é[e] と ó[o] が，フランス語では，é > ei > oi > wa, ó > ou > œ と進化し，「ガロ・ロマンス的二重母音化」とよばれるが，スイス・ロマンシュ語（スルミラン語，ピュテール語，ヴァラーデル語)でも，同じ進化の方向をたどる．

ラテン語 SĒRA「夕方」，俗ラテン語 *SÉRA > 伊 sera ; 古代フランス語 seirə, 現代フランス語 swa:r ; レト・ロマンス語(スルシルヴァン) sera,（スルミラン）seira,（ベルギュン地方のピュテール）segra,（ピュテール）saira

II）形態・統語　現代レト・ロマンス語の形態・統語面での特徴としては，まず，格体系の部分的保存があげられる．ラテン語の格体系は，ロマンス諸語においては，まず，主格と斜格（主格以外の格が融合した格）という2つの格に単純化される進化の過程をたどった．上述の，ラテン語の屈折語尾 -S の保存は，レト・ロマンス語の文法体系の形成に決定的な要素となったのである．

1）形容詞主格の -S の保存　スイス・ロマンシュ語の一方言であるスルシルヴァン語では，属詞の位置にある形容詞の男性単数が -s をとるが，この現象は，2格体系(主格／斜格)の段階の痕跡をとどめている特徴であると言える．2格体系の保持は，ガロ・ロマンス諸語に共通する特徴であるが，フランス語では，中世後期には消滅している．

<レト・ロマンス語(スルシルヴァン)>

Igl um ei naschius libers.

「人は自由に生まれている（生まれながらにして自由である)」

(cf. ラテン語 ILLE HOMO EST NATUS LIBERUS)

2）人称代名詞と定冠詞の与格　エンガディン地方の方言（ピュテール語とヴァラーデル語）を除くレト・ロマンス諸語には，人称代名詞に，主格，対格（直接目的格）に加えて，与格（間接目的格）の形があり，対格の me「私を」と与格の mi「私に」（または，a mi) が対立している．ただし，ピュテール語では，与格的な機能は，前置詞 a を用いて，分析的に a me のように示される．ちなみに，現代ロマンス諸語の多くにおいては，対格／与格の対立は，3人称の代名詞にしか残されていない．たとえば，フランス語では，次のようになる．

le「彼を」，la「彼女を」/lui「彼(女)に」; les「彼(女)らを」/leur「彼(女)らに」

この与格の保持は，定冠詞においてもみられる．スイスのスルミラン語では，表2のような体系をもつ．与格には，男性・女性の性の区別はない（大文字は，ラテン語)．

〈表 2〉 スルミラン語の定冠詞

		主格＝目的格	与　格
単数	男性	il (<ILLU)	li (<ILLI)
	女性	la (<ILLA)	
複数	男性	ils (<ILLOS)	lis (<ILLIS)
	女性	las (<ILLAS)	

《スルミラン語》

il fegl「息子は(を)」/ li fegl「息子に」

他のレト・ロマンス語では，独立した与格形はもたないが，この場合，定冠詞と前置詞 a が融合して，たとえば，ピュテール語では，al(男性単数)，als(男性複数)のようになる(cf. ルーマニア語では，名詞に後置される定冠詞が，主格・対格形に対立する与格形をもつ．lupului「狼に」/ lupilor「狼たちに」)．

3）句構造の分析的形成　レト・ロマンス語の形態・統語面で注目すべき点は，分析的統語構造の発達である．ラテン語の格体系の崩壊と平行して，さまざまな前置詞(a, de, など)を名詞に付ける句構造を好んで用いる方向をとった．これは，他のロマンス諸語にも共通してみられる，名詞句形成の分析的な特質である．レト・ロマンス語では，さらに動詞句においても，前置詞を用いて未来形を表わすのが一般的である．すなわち，語末の活用で未来時制を示す代わりに，VENIRE「来る，なる」＋AD「に」＋動詞不定詞，の構造をとる．

《スルシルヴァン語》

Jeu vegnel a salidar.

「私は，挨拶をするだろう」

スルシルヴァン語では，未来形としては，動詞 vegnir「来る」と前置詞を用いた，この迂言法的未来しか存在しない．他のレト・ロマンス語では，多くの選択可能性をもっている．同じ意味の文を例にとろう．

《ヴァラーデル語》

Eu salüdarà.（合成的未来形）

Eu vegn (a) salüdar.（gnir「来る」＋不定詞）

Eu vögl salüdar.（助動詞 vulair「欲する」＋不定詞）

フリウリ語では，上の形成法のほかにも，次のようなものがある．

'O ài salutâ.（助動詞 vê「持つ」＋不定詞）

ラテン語からロマンス諸語への進化の過程で，動詞の語末の屈折語尾があいまいになったために，不定詞の後に，動詞 HABERE「持つ」を助動詞として付けることにより，分析的未来形が形成された．レト・ロマンス諸語も，上記のスルシルヴァン語を除き，この未来形をもつ．歴史的には分析的な形成であったこのタイプの未来形も，共時的には，レト・ロマンス語では，合成的未来形と言える．最後の例であるフリウリ語の迂言法的未来形は，助動詞 vê (< HABERE) を前においている点で，興味深い．

4）語　順　レト・ロマンス語は，ロマンス諸語の一般的タイプである，VO 型の統語構造をもつ．名詞句においては，少数のカテゴリーの限定詞とごく限られた前置詞を除いては，修飾語(句)は後置される．動詞句においても，目的語と補語は動詞の後におかれる．ただし，レト・ロマンス語においては，縮約形として現われる人称代名詞の前接と後接が，豊富にみられることが特色である．

スイスのレト・ロマンス語(ロマンシュ語)では，動詞が文の第2位置におかれる．文頭に，目的語，状況補語などが先立つ場合にも，動詞は第2位置を守って，主語がその後におかれ，いわゆる倒置が起こる．

《スルシルヴァン語》

Plaunet s'avischina il cavrer.

「ゆっくりと，騎士は 近づく」

(文頭に副詞 plaunet がおかれたために，主語の il cavrer が動詞 s'avischina の後におかれている)

これは，ドイツ語傍層と関連するガロ・ロマンス語的特徴とされ，近代フランス語にも部分的にみられた語法である．ロマンシュ語では，この語順は文法規則となって，厳しく守られている．これについて，ハイマン(J. Haiman 1974, 1988)は，ゲルマン諸語と，おそらくはその影響をうけたレト・ロマンス語とフランス語が，動詞と離れた位置に(前か後に)主語代名詞を必ずおき，省略できない統語構造をもっていることと関係させて，インド・ヨーロッパ諸語の中でも特異な言語タイプとしてとり上げている．ただし，イタリア国内のレト・ロマンス語であるドロミテ・ラディン語とフリウリ語では，分離的主語の存在は必須のものではなく，動詞の第2位置は要求されない．

III）語　彙　地理的・文化的に隔離されていた，スイス，アルプス地方のロマンシュ語では，多くのロマンス諸語においては別の新しい語にとって代わられた，ラテン語の古い形が残されていることが，特徴の第1である(表3を参照)．

また，アルプス地方のインド・ヨーロッパ語以前の言語民族基層によると考えられている，若干の単語が伝承されていることが，このレト・ロマンス語の語彙の特異な点である．たとえば，crap または clap は，「山の岩石，ガレ場」を，また，alp は，「高山の草原地帯，アルプス」を表わす，この地域の古い語彙である．

『イタリア，南スイス言語地図』(K. Jaberg und J. Jud, 1928–40)に収録された基礎語彙を中心に調査した，J. レッドファーン(J. Redfern, 1971)に従えば，起源別にみた語彙の組成は，レト・ロマンス諸語すべてにほぼ同じ比率になっている(ラテン語系の基礎語彙が75%，ゲルマン語系が19%，ケルト語系が2.5%，その他3.5%)．これを論拠に，レト・ロマンス語の内的一体性を主張するのは，多少の無理があるにしても，これらの言語の間の言語接触の歴史は明瞭である．特に，ゲルマン語系の単語が基礎語彙の約5分の1を占めている事実は，ドイツ語圏からの強い干渉の状況を物語っている．とりわけ，傍層的に接触している，スイスのライン川源流地帯のロマンシュ語諸方言では，マスメディアや学校教育(小学校4年から，全科目がドイツ語による教育)の影響の下に，語彙面での直接ないし間接の借用がきわめて多い．スイスでは，このような厳しい条件の中でも，ロマンシュ語を現代語として蘇らせるために，ロマンシュ語本来の，ロマンス語的造語法にかなった新語を創造する努力をつづけている．

以上，みてきたように，レト・ロマンス語は，基本的には，ロマンス諸語のうち，「西ロマニア」グループの言語に属する．とりわけ，顕著なガロ・ロマンス語的，ガロ・イタリア語的特徴を示し，フランス語，フランコ・プロヴァンス語，イタリア北部のロンバルディア語などと共通した音声進化をとげている．特に，ケルト基層の存在による一連の特徴(口蓋化など)の保存に関しては，ほぼ，全レト・ロマンス語領域において，内的統一性がみられる．ただし，フリウリ語については，他の2地域と少し異なった特質を認めるべきであろう．

レト・ロマンス語の一体性と独自性は，共時的，類型論的な言語事実にあるというより，むしろ，通時的観点からの共通特徴と，周辺言語からの影響下にあるための干渉関係に，その特質を示すと言ってよい．

〈表 3〉 ラテン語とピュテール語の語彙比較

ラテン語			ピュテール語	イタリア語	フランス語
CODICE	「本」	>	cudesch	libro	livre
CASEOLU	「チーズ」	>	chaschöl	formaggio	fromage
PLACITU	「ことば」	>	pled	voce	mot
COCCINU	「赤」	>	cotschen	rosso	rouge
MELINU	「黄色い」	>	mellan	giallo	jaune
ALBU	「白い」	>	alv	bianco	blanc

[辞　書]

Dicziunari Rumantsch Grischun (Società Retorumantscha, Chur, 1939–　)——スイスのロマンシュ語諸方言の語彙を網羅する辞典．

Meyer-Lübke, W. (1935³), *Romanisches etymologisches Wörterbuch* (Carl Winter, Heidelberg)——レト・ロマンス語諸方言の語形を採録する辞書．

[参考文献]　以下では，レト・ロマンス諸語全般にわたる参考文献をあげる．個々の言語についての詳細な文献は，「ロマンシュ語」「ラディン語」「ドロミテ語」「フリウリ語」などの項を参照されたい．

1）書　誌　レト・ロマンス語研究の主な文献や資料を調べるには，次の2点の該当項目を参照するのがよい．

Bibliographie linguistique (1939–　) (Spectrum, Utrecht)

Zeitschrift für romanische Philologie, Bibliographie (1886–1960) (M. Niemeyer, Halle ; 続いて，*Romanische Bibliographie*, M. Niemeyer, Tübingen, 1961–　)

また，この分野に限られた書誌には，次のようなものがある．

Bibliografia Retorumantscha (1552–1984) e Bibliografia de la musica vocala retorumantscha (1661–1984) (1986) (Lia Rumantscha, Chur)

Decurtins, A., Stricker, H. und F. Giger (1977), *Studis romontschs 1950–1977* I, II (Società Retorumantscha, Cuera)

Iliescu, M. (1971), "Bibliographie orientative et sélective des dialectes dits «rhéto-romans»", *Revue Roumaine de Linguistique*, Vol. 16 (l'Académie de la République Socialiste de Roumanie, Bucarest)

Iliescu, M. und H. Siller-Runggaldier (1985), *Rätoromanische Bibliographie* (Institut für Romanistik der Leopold-Franzens-Universität, Innsbruck)

Maxfield, M. E. (1941), "Raeto-Romance Bibliography", *Studies in the Romance Languages and Literatures*, Vol. 2 (University of the North Carolina)

2）概説書　レト・ロマンス語全般にわたる概説は，次のものが便利である．

Bec, P. (1971), *Manuel pratique de philologie romane*, Tome II (Picard, Paris)
Bonfante, G. (1935), "Quelques aspects du problème de la langue rhétique", *Bulletin de la Société linguistique de Paris* 36 (Paris)
Bourciez, E. (1967), *Éléments de linguistique romane* (Klincksieck, Paris)
Decurtins, A. (1964), "Das Rätoromanische und die Sprachforschung, Ein Übersicht", *Vox Romanica*, Tome 23 (Francke, Bern)
Kuhn, A. (1951), *Romanische Philologie* I : *Die romanischen Sprachen* (Francke, Bern)
Pop, S. (1950), *La dialectologie* I (Duclot, Louvain)
Rohlfs, G. (1952), *Romanische Philologie* II (Carl Winter, Heidelberg)
——— (1975), *Rätoromanisch* (C. H. Beck, München)
Tagliavini, C. (1959³), *Le origini delle lingue neolatine* (R. Pàtron, Bologna)

3）初期文献の形態論的記述により，スイスのロマンシュ語と，ドロミテ語を対照した研究.

Mourin, L. (1964), *Introduction à la morphologie comparée des langues romanes*, Tome 4 : *Sursilvain et engadinois anciens, et ladin dolomitique* (De Tempel, Bruges)

4）レト・ロマンス語学を創始した先駆的業績としては，次のようなものがある.

Ascoli, G. I. (1873), "Saggi ladini", *Archivio glottologico italiano* I (Loescher, Roma/Firenze/Torino)
Gartner, Th. (1883), *Rätoromanische Grammatik* (Henniger, Heilbronn ; repr. 1973, Wiesbaden)
——— (1910), *Handbuch der rätoromanischen Sprache und Literatur* (M. Niemeyer, Halle)
Planta, J. (1776), "An account of the Romansh Language", *Philosophical Transactions of the Royal Society of London*, Vol. LXVI (London)

5）レト・ロマンス諸語の特質と一体性を論じた研究.

Gamillscheg, E. (1948), "Zur Entwicklungsgeschichte des Alpenromanischen", *Romanische Forschungen* 61 (Junge, Erlangen)
Haiman, J. (1974), *Targets and Syntactic Change* (Mouton, The Hague)
——— (1988), "Raeto-Romance", *The Romance Languages* (Routledge, London)
Holtus, G., Metzeltin, M. uud Ch. Schmitt (eds.) (1989–), *Lexikon der Romanistischen Linguistik* (Max Niemeyer, Tübingen)
Redfern, J. (1971), *A Lexical Study of Raeto-Romance and Contiguous Italian Dialect Areas* (Mouton, The Hague/Paris)
Rohlfs, G. (1954), *Die lexikalische Differenzierung der romanischen Sprachen* (Beck, München)
Wartburg, W. von (1956), "Die Entstehung des Rätoromanischen und seine Geltung im Land", *Von Sprache und Mensch* (Francke, Bern)
——— (1967), *La fragmentation linguistique de la Romania* (Klincksieck, Paris)

6）言語地図.

Jaberg, K. und J. Jud (1928–40), *Sprach- und Sachatlas Italiens und der Südschweiz* (Ringier & Co., Zofingen ; *Index*, Francke, Bern, 1960)——レト・ロマンス諸語の領域を含む言語地図.

[参　照]　ドロミテ語，フリウリ語，ラディン語，ロマンシュ語，ロマンス諸語

（富盛　伸夫）

レフ諸語　ポーランド Narzecza lechickie, Grupa lechicka, 露 лехитские языки, лехитская группа, 英 Lekhitic dialects group

インド・ヨーロッパ語族，スラブ語派，西スラブ諸語の中の一群の言語をまとめてよぶ名称．スラブ語派の立場からみると西スラブ語の方言という意味の呼称になるが，そこに所属する1つ1つの言語，たとえば，ポーランド語やポラブ語の立場からみると，レフ諸語，あるいは，レフ・グループという意味の呼称になる．

スラブ語派の中でも，西方群は分散の程度が東方群や南方群より激しく，すでにスラブ祖語の中にその傾向があったと見なされている．また，スラブ祖語崩壊後の歩みの中で，西スラブ諸語の一部においては，逆に収斂の動きもあって，その変遷は単純ではない．

学者により，細部でいろいろな相違があるが，大体のところで一致している見解によれば，西スラブ諸語，すなわちスラブ語派の西方群は，1）レフ諸語，2）ソルブ諸語，3）チェコ・スロバキア諸語，に分類される．このうち，2は上ソルブ語と下ソルブ語，3はチェコ語とスロバキア語のそれぞれ2つに分かれ，この所属については疑問はない．しかし，レフ諸語の内容にはいろいろ異説があり，しかも，この1の言語特徴の一部は，下ソルブ語とも共通するものがある．

レフ諸語には，現在は死滅した，レフ諸語中の西のグループ（その中で代表的な言語はポラブ語である）と，東のグループがある．カシューブ方言は，その代表であるポーランド語とは別の，独立した1つの言語と見なされたこともあったが，現在ではポーランド語の一方言と見なされている．このカシューブ方言は，ポラブ語を含む西のグループとポーランド語との中間に立っている．

レフ諸語に共通する新しい傾向には，前舌の鼻母音 ę の，後舌の鼻母音 ǫ, ą への推移がある．スラブ祖語の *desętь「10」，*desętъ「10番目の」は，ポラブ語の disąt, diśǫtě に，また，ポーランド語の dziesięć, dziesiąty に対応する．

また，本来，音節を形成する口蓋音の r̥, l̥ が，非口蓋化している．スラブ祖語の *čr̥nъ「黒い」，*čr̥nica「黒イチゴ」は，ポラブ語で cornĕ, carnaića が，また，ポーランド語で czarny, czernica が対応する．

スラブ祖語の *tort（t は，任意の子音）は，ソルブ語で trot となっているのに，レフ諸語では tart が対応し，ポラブ語では gord「城，町」，gorch「豆」が対応する．この変化は，東に行くにしたがって例外的なものとなる．

レフ諸語では，スラブ祖語の *g も保たれ，g > h と変化した他の西方群の諸言語とは異なっている（ポーランド語 gród : チェコ語 hrad）．

[参考文献]

Селищев, А.М. (1941), *Славянское языкознание*, т. I : *Западнославянские языки* (Москва)
Bednarczuk, L. et al. (1988), *Języki indoeuropejskie* (Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa)

[参　照]　スラブ語派

（千野　栄一）

ろ

ロシア語　русский язык, 英 Russian, 独 Russisch, 仏 russe

[系　統]　ロシア語は，インド・ヨーロッパ語族のスラブ語派に属し，ウクライナ語およびベロルシア語（→白ロシア語）とともに，その東方群，すなわち，東スラブ諸語を形成する．

東スラブ諸語を他のスラブ諸語から分かつもっとも重要な特徴は，母音重複（полногласие, full vocalization）とよばれる現象で，たとえば，スラブ基語（PS）*gordŭ に対し，

古期ロシア語（OR）gorodŭ「城砦，都市」，ロシア語（R）gorod「都市」，ウクライナ語（U）gorod「都市」，ベロルシア語（BR）gorad「都市」

のように，子音間の流音をともなう音節が，東スラブ諸語では流音の前後に同じ母音が重複する OR の形に遡る対応を示す．これを *tort : torot のように一般化すれば，他のスラブ諸語（南方群と西方群）では，

古代教会スラブ語（OCS）gradŭ「都市，庭園」，ブルガリア語（B）grad「都市」，セルビア・クロアチア語（SCr）grâd「都市，城砦」，チェコ語（Cz）hrad「城砦」，ポーランド語（P）gród「城砦」

などのように，いずれも trat, trot ないし tort のタイプの対応で，東スラブ諸語のような母音重複は現われない．なお，*tolt, *tert, *telt についても，東スラブ諸語では，tolot, teret, telet の対応が認められる．

後述（「歴史」）のように，古期ロシア語は，13世紀以降，諸方言が分化，発達する傾向が強まったが，15世紀後半からモスクワを中心とするロシアの再統一が進行する過程で，モスクワのいわゆる大ロシア語（великорусское наречие, Great Russian）が優位を確立する一方，南の小ロシア語（малорусское наречие, Little Russian）と西の白ロシア語（белорусское наречие, White Russian）は，地方語として差別圧迫されるに至り，帝政ロシアでは公式の使用を禁じられた．1917年の10月革命後，はじめて，ロシア語と対等のウクライナ語およびベロルシア語として独自の正書法と文法の規範が定立され，民族語（国語）としての地位が確立した．

[分布・人口]　ロシア語は，現在では，ソビエト連邦のほぼ全域で，公用語ないし高等教育と学術研究の用語としてひろく用いられているが，1989年の国勢調査の結果によれば，ロシア語を母語とする者1億6,350万人，第2言語とする者6,900万人で，その合計2億3,250万人は，ソ連邦の総人口の約81.4%に達している．ロシア語を母語とする者の中には，本来のロシア人（1億4,480万人）のほかに，1,870万人以上の非ロシア人が含まれていることに注意しなければならないが，その大部分は，ロシア化した大都市のウクライナ人，ベロルシア人，ユダヤ人などである．

一方，国外のロシア語人口については，まったくの推計にすぎないものの，学者によって数値が大きく相違しており，たとえば，海外の「ロシア系住民」の推計に限っても，その数は，150万人から400万人のように大きな幅がある．しかも，そのすべてがロシア語を母語としているとは考えがたいとすれば，海外に居住してロシア語を母語とする者の数は，両極端の平均から推計して，200万人程度ではないかと思われる．